

南相馬市小高区の帰還後の健康問題と実践報告

——これからも求められる医療と地域連携——

Health issues after returning to Odaka-ku, Minamisoma-shi and the practice report:

Medical care and regional cooperation that is required from now on

小野田 克子

Katsuko ONODA

南相馬市立総合病院

Minamisoma Municipal General Hospital

東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所の事故によって避難指示を経験した南相馬市の保健活動と題して、3名のシンポジストが活動報告をした。震災後南相馬に移住し、さまざまな健康問題に対応してきた原町保健センター保健師、メンタルヘルスの新しい拠点として住民に認知されつつある相馬広域こころのケアセンター保健師、そして「医療」という立場で地域住民を支えるために活動してきた私の報告であった。

保健師の資格を取得してから28年、臨床看護師として生まれ育った地域で活動し、原発事故後もこの地を離れることなく、住民に寄り添い共に生きる生活者である看護師として「何ができるか」を常に模索してきた。そのなかで、平成29年度から開始した小高区での在宅診療の取り組みは、私にとって地域医療の再生を考えるうえでも大きな影響を与える活動であった。

小高区で始めた「訪問診療」は、定期的な医療を受けることで、住み慣れた地域で「その人らしく」安心・安全そして穏やかな生活ができることを支援することを目的としてきた。避難指示解除後から、住み慣れた場所に戻りたいという強く願う人。戻ることを余儀なくされた人。「これでよかったのか」と自己の意思決定を振り返る人など、さまざまな複雑な思いを抱え、高齢化率が50%を超える地域で「生活すること」を支援するためには、シンポジストのお二人のように、地域で住民と共に活動し、その地域の現状や生活状況を把握している専門職やさまざまな人々との連携が不可欠だった。また、「生活をみる」視点がなければ目的達成ができないこと。その人らしくいられるために、私たち医療者ができることは何かを「共に考える」ことが重要だった。まさに活動のキーワードは、「情報共有と連携」であった。

また、訪問診療の「補完」として、全国でも例がない在宅診療でのオンライン診療導入に取り組んできた。特に、看護師が患者の自宅を訪問してオンラインでつなぐというスタイルは、「小高スタイル」と言えるぐらい前例がない活動だった。このことは、医師が訪問できない時でも、患者や家族がモニター越しでも直接医師の顔を見て話ができるという「安心感」を提供できること。そして、看護師が介入することで、リスク予防や病状変化への早期対応が可能となり、結果「その人らしい生活を守る」ことができるのではないかと、今後の地域医療における活動への示唆が得られた。